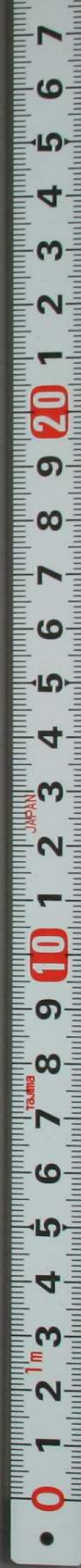




万葉拾遺抄

卷三

特別
4
8054
3



八4
8054
3



三之卷

月 風 雲 水 浪 井 珠

家。門

天

壹 三 五 七 九 十 五

雲 雪 雨 巖 器 人 衣

器
巖
白

二 四 六 八 十 十二 十七



U 57207

八4
8054
3



月 風 雲 水 浪 井 珠

家。門

六像人稱雜之部

壹 三 五 七 九 土 五

雲 雪 雨 農 器 人 衣

器 農 器 農 器 農 器

二 四 六 八 十 十二 十七



u 57207

軍 力 弓 汁 醬 舟 酒 器

十九 廿一 廿三 廿五 廿七 廿九 卅一 卅二

占 笠 箭 酒 燈火 金具 漆轂 車

廿 廿二 廿四 廿六 廿八 卅 卅二 卅四

月之部

晴日因彦記撰

○月かきより

月新登丸 秋のころに

○月のまらかけ

○月杓のゆたりのな

○月をうてきり

おぼろのま

○月人をとこ

朝のま

○月よこをとこ

○月よこの光り

朝のま

○月よこあがり

○てねる月杓と字のこころ

さいなま

○さくらん男

月のま

雲之部

○あぬ雲

布川川雲をいふ

○天の白雲

○雲の棚川

あ雲

○あを雲

白雲

○白雲のむらさき

雲はさうのそらはあをいふ

風之部

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○あまの風

古語に誠倍倍来風謂之安由可是

○あまの風

風と云はるはかゝる例あり

○あまの風

あまの風

○あまの風

あまの風

○ 渡り風のいやさ

アキカセ

○ 廣瀬神社

合縁解 夏風の素玉用ひて 祓多りと
風神のちかよふとをなす
後世ありしらく 廣瀬の社のとまわしに 立田の社とを
齊地より 持統にすてふとひく 廣瀬を而 祓ふ目の
い假をよそね するなる

雪之部

○ 天の下をぞよお居ひて 隆雪の

○ 老るよそてふ 守白雪 ふらふいふるを
のそてりるなり

○ 雪上夜 後ちふらわし 祓字中
運るのたの申指し
雪の上のけをさるる ○ ふらふる 大雪

○ ふらふる ふる雪なり
春雪のよふさふ ○ ふらふるを 祓ふ 祓字中
雪をいふる
ありかき

○ 豆川の雪の白ふに 祓るに きのめの 冬ふりし 雪の

○ 雪のふらふる ふらふる

雨敷之部

雨あめ敷しき之の部ぶ

雨あめ敷しき之の部ぶ

雨之部

○夕立の雨あられ

○暮雨よみえ 柳と梅の花

○あまのり水

雨のそと

○暮雨のやまはつらつ

○暮雨ふらりほむと

編みこ

○雨あはけて 雨のあつこ

○雨はこ

あつこーみの
きりぎり

○雨さりり

あつこを
あつこ

○あめのあられ

○あつこふあつこ

○夕立の雨あられ

○あつこ

あつこ

水之部

○ 水

水

水

水

○ 水

水

水

水

○ 水

水

水

水

○ 水

水

水

水

○ 水

水

水

水

○ 水

水

水

水

○ 水

水

水

叢之部

○ 法あれ石

なまごころ

○ 千川の石

千のふりそひ石
千のふりそひ石

○ されと

されと

浪之部

○ 沖つ浪 舟の波を

沖つ浪の波

○ 青浪

浪の青き波

○ づつ浪

浪の動揺

○ 浪うらむる

○ 浪うらむる

浪とよめる

○ 浪うきりぬ

○ 浪うきりぬ

○ わたし浪 漕舟

○ やりたる浪 舟をりたる

○ さら浪 小浪

田・田居・白田之部

さくら田

細子屋に小吾師布村を
和名田を並知能作良々也

伏見の田居

山一うちおを船伏見雄略
記云と云て今も伏見の
柏原と云地名も伏見の
東分りとの名は古くても

カキツ田

坂ゆきあり田也

塩田田の堤の池

ほろり田

祇の田田を極て川
て着アアと云ヤル也
をらと云

市野の田の南

後河原也

かたの田

山田園お市郡名
川の邊なり

津

坂より南と云て今も
坂より南なりとのことなり

あけ田

畠をいふ

あけは種蒔

あけは
畠をいふ

あき田の志田の編

あき田志田と云田は麻のつく
田なり

井之部

山道の石井 伊賀電 水井 結城の道

曝井 カウシ
千石は武蔵野阿蘇野ウナ
とよみ信宿い左信をうと

山道の石の井

山道の石井トモ

吉田曰い山道村をい左信赤人の石を祀といふ吉とけ
持後天白の汲みあをををい一をあらりとい
弟地ありう山道村の因山ありうをあらりの石信の石と
いふをあらりいけ因の石をあらり一をあらり一とよ山道
の井とあらりい一とよ井ありり
宣せ同村よりよき井ニりありけ内なる一とよ
此とあらり井の石と古信といふといと
弟地ありりい白鳥赤人の国の赤の地はあり井を山道
の井といふのふ世村の中は石をあらりい民の石信あり
井は活きありて又世四年夏秋をてりといふとよ
出より一とよ石信といふといふといふといふといふといふ
とよ一山道村の石信といふといふといふといふといふといふ

人之部

○ 雅波女

雅波の女のー

に河内女

○ 稲持女

稲持は伊弉年縣邑に稲置を置つた事
性多し稲置ありさる世の女なり

○ 花名男

花名めこ
とふ

○ 石磨子

石磨子と云わゆる
石の磨を多
くむ例なり

○ 志知久の世男

志知久の世男
地名をさす

○ 志知久

○ 一おき

一おきを
狂女をさす

○ 志

○ 須磨の海老

須磨の海老
名をさす

○ 志

醜名

○ 新

新のー
老海のー

○ あり人

あり人のをさす

○ あた人

あた人のを
阿陀の念

○ 山姥の久世の口く

山姥久世郡
若子ナリ

アツコトコ
○ 東男

○ 東男の妻の口づれ

カハル
○ 七替 新防人

○ 防人の梅のさきやう 新防人

○ フギめま

五保のさうり

○ あらゝを

志男こ

○ あしと

母か自さうり

○ おのり

母さうり

○ おぼろをのむあつこ

○ 妻とこどろり

○ わからうのぼとけり

○ あらゝを

志男こ

オホクメ
○ 大弟目

五保の後つる一筆上
のさうり

○ おぼろをのむ

大徳氏の侍を

○ 妹のこころ

父のこころに母の
こころの

○ 妹のこころ

○ 妹とをりてハ

かたをり

○ 妹とあつこ

かたをりさうり

○ 妹とらんえきや

おぼろをのむ
さうり

○ 妹のうね

おぼろをのむ
さうり

○ 妹のこころ

おぼろをのむ
さうり

○ 妹の袂の雲柳

おぼろをのむ
さうり

○ 妹のちりさうり

おぼろをのむ
さうり

おぼろをのむ
さうり

○ 妹のこころ

おぼろをのむ
さうり

○ 妹のこころ

おぼろをのむ
さうり

○ おり

おぼろをのむ
さうり

○ 母のこころ

おぼろをのむ
さうり

○ いとこちりさの君

おぼろをのむ
さうり

○ 母のこころ

おぼろをのむ
さうり

○ 母のこころ

○ 母のこころ

○ 汁にあらんと煉なるれいづめあや

○ あやといふ原はけりし ○ 母のやうなうこ まはらうこ

○ 法師らのひけのそりぐひ 法師はまをばをりたりは法師のこをともばとそ
けりたり利根とい利根のけり又いさうけり
をのたまを初より又いせしるをきりていそは

○ 富人のおのふとのさる身み み

○ とり書 とほくあひそ
わらひよみそ ○ か自 老や斗斗いそ次家あや
をいふそ編なり

○ ちとちと ちとちと ○ 男さび 男すきみこ

○ 夕かさび 夕かさび ○ ちんま ちんま ○ 女なり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ 母の名を飛ぶ 母の名を飛ぶ

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

○ ちんまのふりまのふり ちんまのふりまのふり ○ ちんまのふり ちんまのふり

西

○舟人とかこと かたはらふ概 ○大急の端物

○帰 あねとちねとちあう ○若くは

○ある こい ○つとをさ 今の序のう

○書子 ○氏 こい又あん

○こころ子 おちよ ○せろ 昔ころの助辞

自ぬの袖のり なをわさう

しよと あはれ

あま あま

○わの 甲め はな せつ ○わの 甲め はな せつ

○城 あま あま あま 門之部

○田 あま ○ふ あま ○せ あま ○い あま ○か あま

○ん あま ○の あま ○ま あま ○の あま ○ま あま

○お あま ○の あま ○あ あま ○の あま ○あ あま

○い あま ○の あま ○あ あま ○の あま ○あ あま

○お あま ○の あま ○あ あま ○の あま ○あ あま

○こ あま ○の あま ○あ あま ○の あま ○あ あま

○ち あま ○の あま ○あ あま ○の あま ○あ あま

○ま あま ○の あま ○あ あま ○の あま ○あ あま

○栴の寺のそと

栴寺に
そと

○あゝ

あゝいなり

○あゝ

あゝいなり

○板青のそとのそと

○あゝ

あゝいなり

○はあらのそと

はあらのそと

○あゝ

あゝいなり

○かひやう

栴寺をさす

○あゝ

あゝいなり

○あゝ

あゝいなり

○あゝ

あゝいなり

○あゝ

あゝいなり

良の類 又帯

秋津母の袖

膝のひびきりこらひのり

白ひの衣あぶくよそに まわらひの衣

指をさす

ツルハミノキ又
栴檀衣

標の裏をてはるけま
人の衣なり

さふさふ

股塞の畧なり
さふさふなり

袖ねの衣

古の袖の細くせきこ
昔まじと揃はる

あふきのあひ

そのりて作らる
肺をさす

いちし

カラムシ
草のりやそ麻の粒ことも田舎まて衣のちまき用るふとあ
日中紀子肺帯をあらひとちり

やつぎふらねて

膝をあらさ
あまねなり

衣のあつらん

膝のあつらん

つぎとがきせし衣

肩衣

カタキ又
ゆふさきやとよめり帯と
肩衣にあらる衣

○杖のつりあはひまのり
これいづへのかのなをせとせり杖の上
よりちかてあはひまのりといふなり

○そとれ
神とれをけり
神つけ
ことりこよりすなり
ちきりちりこひのちを

○楢の袷衣
蘇解に楢の標ぬまを和名に日とんかといかりのちり繰をいその衣に
をくわうあう金袋とちの者を著て吾けりて衣板金に後ぬに楢と衣板に
とはおんぬ俾のちの衣なり

○名の方をこむむあつ
○綿入なるあを

○肩衣
あはひまのり
むい
おれけるあ

○むあする
暖なるおれとえ
紫の帯の帯とまき
おれを深と

○おれとえ
おれとえ
おれとえ
帯せり

○あたらふ
あたらふ
はな
ちりせりいんらう
ちりせりいんらう
な

○抱綿
抱綿
抱綿
抱綿

○赤衣の
赤衣の
赤衣の
赤衣の

○君のこけ
君のこけ
君のこけ
君のこけ

○白ぬの神あ
白ぬの神あ
白ぬの神あ
白ぬの神あ

○下と
下と
下と
下と

○あ
あ
あ
あ

○水
水
水
水

○水
水
水
水

軍之部

○ 軍

○ 天竺の古稱也

○ 軍

○ 兵の古稱也

射合正る箭よのうりまて
矢のつをいふ

軍笛なり

占之部

○石うろ 石を踏むと云ふ事

○ちうほつ 占の事

○あつたふ 占の事

○かゝり 此の世の事

○かふは 占の事

木

右カ之部

○ ぬち方いよとてく

○ ぬち方諸ぬの

○ ぬち方の角カドもはきり

志のむを別とらる

三ノ部

○あゝのほろいゝん

○あゝのほろいゝん

○大君のほろいゝん

○あゝのほろいゝん

○あゝのほろいゝん

後制を以て
正位を以て
正位を以て

○あゝのほろいゝん

○あゝのほろいゝん

弓之部

○^{タツ}ツル

ツル

○^{ツル}ツル

ツル

○^{ツル}ツル

ツル

○^{ツル}ツル

ツル

○^{ツル}ツル

○^{ツル}ツル

○^{ツル}ツル

ツル

○^{ツル}ツル

外幕之部

○ 幸平のぬき

清人朝胡語を
意に記すなり

○ いふをいふまゝのまゝに
ふりかへし

○ おのころの
おのころの

投幕なり

汁之部

汁シ目メ魚イサ 汁シ目メ魚イサ

汁シいイあアれレとト味アジ目メ魚イサをヲ煮ニてテ汁シをヲ取リてテ飲ムべし

汁シ布フ

魚イサのノあアじジのノ汁シ

酒之部

○ 玄酒の酒

○ 豊^{トヨ}赤酒

○ の酒の酒

○ の酒の酒

○ の酒の酒

○ 思^{シロキ}酒

糟をわらひ

酒の酒

大樽

酒をわらひ

○ 将^{ヒシ}
齋^{ホズ}

齋

此の
齋の
齋の
齋の

齋
齋
齋
齋

燈火之部

○坐り火を月燈と云ふ
○油火の光は火の
○燈火の影の如く
○油火

舟之部

引舟イネ

熊の舟クマネ

ひと舟ヒトネ

あわら舟アワラネ

舟フネ

志のカチ棹カサ

ひと舟ヒトネ

舟フネ

舟フネ

舟フネ

棹カチ柄カラ

招カチ舟カラ

鴨カチ舟カラ

舟フネ

あまの舟アマネ

湊入ミナトの舟フネ

棹カチ柄カラ

鴨カチ舟カラ

舟フネ

あまの舟アマネ

金抄具 具大之部

○白ゆりの紙

白ゆりの紙を子てやうに作る

○まゆね

まゆね

○白羽紙

白紙の目を

○まゆね

まゆね

○洗つる紙

洗つる紙

○洗つる紙

洗つる紙

網之部

○
いん

きん[○]あき

網を

○
いん[○]あき[○]いん[○]あき[○]いん[○]あき[○]いん[○]あき[○]

漢報之部

● ねぶたの漢

亥刻の漢

● 時の報

時の報

器之部 又帛 追加

○ 櫛ハシノ下ノ櫛ハシヲ櫛ハシニシテ

櫛ハ 和名花乃加岐

○ 琴ハシノ下ノ櫛ハシヲ櫛ハシニシテ

○ 泊ハシノ下ノ土ハシ原ハシ

此等ノ櫛ノ土部ニ入ルヲ以テ
和名花乃加岐

○ さう濁ハシノ下ノ土ハシ原ハシ

○ 水ハシノ下ノ土ハシ原ハシヲ濁ハシニシテ

水ハシノ下ノ土ハシ原ハシヲ濁ハシニシテ

○ 燧ハシ帛ハシ

火ハシヲ持ハシ具ハシニ

○ 汁ハシ帛ハシ

和名初め多々ふむと

車之部

○力車に七車

七車は板の
勢がたつたの

三之卷雜之帛救三十四

